

お尻が引けた姿勢で動く重度精神遅滞女児にみられた 動作訓練を通しての発達的变化

— 動作の学習とそれに伴う日常生活行動や
心理面の変化の観点から —

The development through DOSA Method in a girl with severe mental retardation who can not stand upright

— Learning the movement and the progress in daily activities and
mental condition —

秋津容子¹⁾ 石川尚子²⁾

Yoko AKITSU and Takako ISHIKAWA

Abstract

In this paper we presented the case of a girl with severe mental retardation who was in the sixth grade. She displayed passivity and refused what she disliked stubbornly. Her body showed hypertonia and she flopped and walked heavily with her standing posture like a reversed hiragana 'く'.

In the training to her we applied DOSA Method, which is the way of helping to develop by coaching movements, because we considered that the method tended to draw forth unvoiced potentiality a girl with severe mental retardation. We studied her movements and mental condition in the training and in her daily life, and we also investigated the mechanism of development.

There were some progress in her that occurred in her training during three months and one year. Though she was unconscious of her own body and reluctant to exercises at the beginning, she became conscious of her body and addressed the trainings while she moved her body, being helped by her trainer. As a result she learned to relax her excessive muscle tension and improved her standing posture by making her buttocks shift forward. At the same time, she began to show spontaneous movement in training and could do new movement, which made her face more expressive and her gaze movement controlled. she came to mix up with others.

keywords : a girl with severe mental retardation, DOSA Method, standing posture

I. はじめに

重度精神遅滞児は、中枢神経系の機能に何らかの損傷・不全が生じたために、知的な遅れを中心に全般的に発達遅滞をきたし、知的教科の学習や社会的適応が著しく困難である。遅滞の程度によっては、日常生活の多くの場面において介助が必要になったりもする。しかし、これらの遅れのすべてが、一次的障害というわけではない。むしろ、一次的障害による活動困難が本来持っている潜在能力の顕在化を妨げるので、それが二次的障害を大きくする傾向が強いといえる。

ところで、障害の有無に関わらず、運動機能の発達

は子どもが発達するための基礎であり、運動機能に遅れや障害があると知的・社会的にも発達が損なわれやすい。それは、子どもの発達を促す経験は大体においてからだの動きを含むからである(石川：1982)。とくに、自分の意志によってコントロールされる運動は、発達に対して重要な作用をする。というのは、主体的なからだの動きによってこそ、自己機能の拡大がもたらされ、外世界との接面が拡大し、外界とのやりとりに伴う適応行動能力が発達する(林：1992)と考えられるからである。歩く・走るなどの基礎的動作をきちんと獲得していない子どもに主体的な動作を獲得させていくと、身体面・心理面・社会面に変化が生じるが、それは、主体的な動作獲得に伴う自己の身体意識の変化が精神的な成長に寄与するからであると考えられる

1) 日本女子体育大学(教務補助員)

2) 日本女子体育大学(教授)

(深野：1989, 中根・小塩：1982, 中根・二宮：1983).

では、主体的な動作の獲得は、どうしたら得られるのだろうか。その方向で考えられるものに動作法がある。“動作法”は、成瀬・大野・星野らが、脳性まひ児の不自由動作を改善するために1965年頃から取り組み始めた動作訓練（動作の再学習を促したり、動作スキルを高めるために行う訓練）の技法の開発の中から生まれた心理療法であり、トレーナーが対象児のからだにトレーナー自身の動作で働きかけ、その働きを受けて子どもが自分のからだを弛緩・緊張させたり、意図的に動かすというからだの体験を通して、自分の動作の誤りや動作のできなさに気づき、より正しい動作を学んでいく方法である。トレーナーとの相互作用の中で適切な動かし方を把握していく過程において、子どもが動作困難の克服の仕方を身につけ、正しい動作パターンを習慣化し、自己をコントロールする意識を高めていくことが期待されている（成瀬：1995）。

本研究は、重度の精神遅滞児の発達を促す関わり方を実証的に探ることを目指している。対象児は次項で述べるような小6重度精神遅滞児 A 子である。直接的な目的は、A 子の二次的に置き去りにされているかもしれない能力を引き出すことができる支援・関わり方を探るために、動作訓練を適用し、1) 動作の訓練によって身体的には何を学習することができるか。また、その学習は心理的社会的側面に対してどのような効果をもたらし得るか、2) 出っ張ったお尻を入れる訓練はどのような意味があるのか、などを検討することである。

II. 事例の概要

対象児

A 子 重度の精神遅滞児 小学6年生(担当開始時)
乳児期：出生時体重2520g。人見知りもなく、おとなしく、大変育てやすかった。

幼児期：1歳から保育園。短期間音楽療法。2歳4ヶ月で何とか歩き始めたが、よく転んだ。

小学校：C養護学校に入学。喜んで通学している。

対象児の特徴・筆者（ATr）の担当開始時

動作の特徴

立位姿勢は、お尻が引けて“くの字”（図6：#1）になり、背は反らせている。歩行・走行時もお尻を出っ張らせたままで、バランスをとるためか、いつも手を前に伸ばして上げている（図1：上）。左側に軽いマヒ

があり、上体を右側に傾け、右足に重心をかけて激しくからだを揺らし、大きな足音で足首を返すことなくドタバタ動く。この安定の悪さは、あらゆる運動を困難にしており、また積極的に物事に取り組むことが少ない原因にもなっているように見える。からだは全体的に固いが、とくに首・腰・股関節・足首に動きをぎこちなくする緊張があり、可動域が狭く、動きが鈍い。

日常生活や日常の運動動作の特徴

日常生活においては、視線が散漫でモノにしっかりと目を当てられず、行き先を定めない感じでふらふらと歩き回る。何に対しても受身的で集中力がなく、やりたくないことには頑として動かない。動作訓練を開始する1年前から、筆者らの研究室の交流的スポーツ活動²⁾に参加しているが、自由に遊んでよい時間でも座り込んだり、寝転んだりして、自分から特定の遊びを始めることはなく、大体は学生に遊んでもらえるのを待っていたり、他の子どもが遊んでいるのを見て楽しんでいたり、時々自分でボールを持ってきてボールと放ったり、フラフープを転がしたり、お気に入りの学生を追いかけたりすることはあるが、続かなかった。初来室時点での A 子の発達年齢は、新版 K 式検査で、姿勢運動面ではおよそ1歳半程度、言語社会面ではおよそ7・8ヶ月程度と判断された。この状態像は、ほとんど休まず1年間通い、楽しんだ交流的ス

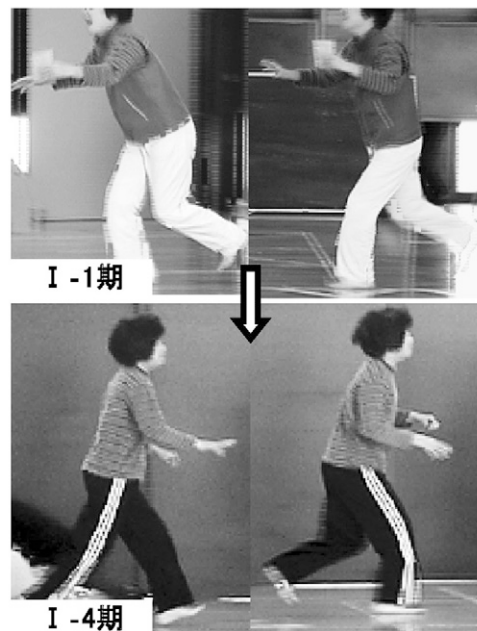


図1 走り方の変化

ポーツ活動においてほとんど変化がなかった。

注) 交流的スポーツ活動：I 研究室では、25年前から、臨床心理士のIの指導のもと、障害児や不応児を対象に、各対象児に個別に付く担当者（研究室生）の援助のもとで、運動遊びやスポーツ活動を集団活動で行い、それを通して情緒の安定や発達を援助している。

III. 動作訓練について

1. 動作訓練の期間と場所

第I期：平成14年5月～3月（27回）O 大学児童臨床心理センター

第II期：平成15年5月～8月（8回）N 大学S セミ室

10回までは毎週1回、11～35回は隔週1回、ともに1回約1時間の訓練を行った。インテークセッションを含め、計35回を研究対象期間としたが、A子の発達サポートとしての訓練はその後も継続される。

2. 訓練形態

第I期：KTrを主トレーナー、OTrをスーパーバイザーとし、第1筆者（ATr）は訓練補助をしながら技法の向上を目指した。

第II期：ATrを主トレーナーとして、IsTr（第2筆者）とIwTrの指導のもとで行った。

なお、交流的スポーツ活動におけるA子の担当者は、第I期は別の学生だったが、第II期はATrが兼ねた。

3. 訓練の実践目標と訓練課題

A子のように自分のからだへの意識が低く、操作能力も低い重度精神遅滞児に動作訓練を行う場合、まずは訓練に取り組むことができることが大事なので、訓練課題はできるだけ単純でわかりやすいものにする必要がある。また、全身的に緊張が強く、緊張の慢性化も見られたので、これらを踏まえて、実践目標とそのための訓練課題を以下のように企図した。

<実践目標>

- (1) “弛緩訓練”を重視する。
- (2) 基本的動作の再学習による不適切な動きの改善を目指す。
- (3) お尻を入れて立つための課題を重視する。

<主な訓練課題>

腕上げ、軀幹ひねり、背反らし、腰入れ、足の踏み

しめ^{脚)}。

注) これらの技法は(大野・村田：2003) 他を参照されたい。

IV. 動作訓練経過

※動作訓練での変化を「訓練」とし、交流的スポーツ活動での運動動作や日常生活行動における変化を「日常」として記す。

I-1期：#1～#6（小6：5月下旬～7月上旬）
～訓練に取り組むことができるようになるまで～

「訓練」：全く訓練に気持ちが向かず、(何をしているのか分からないという感じで) されるがままに、KTrに腕や背中などを動かされていても、まるで他人事のような顔をして母親やATrを見たり笑いかけたりしていた。緊張に当たる(不当緊張によって動きが止まる)と体をよじって抵抗し、手をパタパタ床に打ちつけ、脚を痙攣のように激しく揺らし、泣いて逃げようともがき、なかなか治まらなかった。とくに立位動作訓練は訓練姿勢をとるだけで抵抗し興奮するため、訓練を続けることができなかった。「日常」：訓練に強く抵抗しながらもKTrの働きかけで取り組まされ、他動的に少し弛めることができた#2の夕方、これまでぐずらないことがなかった入浴を初めてぐずらずしたので、両親は「あらっ、変わった！」と動作訓練の効果を意識したという。

「訓練」：#4頃から、自分には関係ないかのように訓練される様子の中に、KTrをちょっと見たり、動かされている自分の腕をチラチラ見たり触ったりすることが出てきた。もちろん逃げようとする方が多く、興奮してきた時には寝かせや肩押さえ^{脚)}を行って落ち着くのを待つことになったが、待っていると、少し時間はかかるものの興奮を自分で治めることができ、気持ちを引かずらずに予定していた課題を行うことができた。他動的(トレーナーに動かされる動作)に行っているうちに、肩周りや背中上部の緊張を積極的に弛めることもあり、僅かに緊張に弾力が出てきた。ただし、腰周りの非常に強い緊張は、背反らし動作でも腰入れ動作でも殆ど弛めることができなかった。「日常」：交流的スポーツ活動では、遊んでもらえるのを待つだけでなく、自分から用具を持ち出してS字跳びをやって見せ、乗ったことのない輪車やホッピングに乗りたいと意思表示し、学校の授業で先生がトンボのポーズを両腕を横に広げてして見せたのを初めて真似た。ま

た、ポーっとした表情だったのが少しハッキリしてきて、視線が定まり、帰りのバスで寝てしまった母親を降りるバス停で起した。

注) 訓練に入れない状態の時に活用される技法で、仰向けに寝かせて、肩に置いた手で心身の動きを沈め、落ち着きを取り戻させるものである。

I-2期：#7～#15 (小6：7月中旬～10月中旬) ～安定した取り組みの始まり～

訓練：肩周りや背中上部の緊張に当てられると、もがいて逃げようとするのではなく、顔をしかめて苦しそうな表情をしながら自分から弛めてきた。腕上げでは、肘を曲げようとする力が入ったり、ガタガタ動いたり、曖昧な動きだったりしたが、#10から腕を見ながら自分で動かしてくることも少し見られた。**日常**：交流的スポーツ活動で、台を置いても全くできなかったトランポリンの上り(図2)が、少しスムーズになった。朝髪を縛られることへの抵抗が弱まり、指を指した方向を初めて見るようになった。また、立位姿勢の背中丸みとお尻の出っ張りが少し減り、担任から「姿勢が良くなった」と言われた(図6：#8)。

訓練：#11～#15の背反らしや腰入れの動作でも、立位動作でも腰周りの緊張を弛めるのは難しく、かなり強い負荷をかけて腰を押し込もうとしても、それを押し返そうとする力を入れてきた。しかし一旦弛み始めると弛みの巾は大きかった。この課題の時はぐずったり興奮したりしやすかったが、寝かせや肩押さえて待つと自分で気持ちを切り換えて、次の課題を行うことができた。**日常**：日常生活での意志表示がハッキリしてきて、学校でのやらなければならないことへの取り組みがよくなり、できなくても何度も試すようになった。また、段差につまずいて転ぶことが減り、からだの動かし方にメリハリがでて、初めてジャンプが



図2 トランポリンの上り方 [I-1期]

可能になった。父から食事のことでからかわれた時初めて悔し涙をみせた。背中と腰の弛め練習をしっかりと行うことができ、立位での踵踏みしめ練習もできた。#11・#13・#14の帰り道、これまでのドタバタした歩き方ではなく、足を踵から地面につけ足の裏を返すパタパタという歩き方をし、その後、下を向いて自分の足をジッと見ながら一步一步確かめるように足を踏み出していた。

I-3期：#16～#21 (小6：10月下旬～12月下旬) ～再び訓練に抵抗しながらも頑張る～

訓練：再び訓練への抵抗が強まり、とくに背反らし動作で強く抵抗し、興奮して大声で泣き叫んだりからだを激しく揺らしたりして訓練を中断させられることが多かった。また、KTrの目を見て「イヤッ」と怒ったような表情で訴え、負荷をかけている部位を逆に押し返す力を入れてくるという、これまでと違った抵抗の仕方をみせるようになった。**日常**：家族や周りの大人に構ってほしくてちょっかいを出したり、母親の指示には必ず首を振るようになった。もともと頑固ではあったが、そこに明らかに自己主張が入ってきた。

訓練：寝かせや肩押さえを行うとすぐに泣き止み、休憩を入れるととたんに笑顔になったが、訓練を再開しようとするともた抵抗した。四つん這いになって逃げようとするA子をKTrと補助者で他動的に訓練姿勢にし、訓練を再開すると、大声で泣き、時々ギョッと抵抗の力を入れてきたが、緊張に当たると不思議に自分で弛めてきた。全般に腕上げ動作訓練には主動の動きが混じり、軀幹ひねり動作の緊張には弾力が感じられたが、弛みは大きかったり抵抗によって小さくなったりした。背反らし動作や腰入れ動作では、頑固な抵抗のためあまり弛まなかった。**日常**：ブロックや積み木といった手先を使った遊びに集中したり、自分から外に出てからだを動かすようになり、美容院で3時間余り静かにしていられたという驚くべきことが起こった。また、登校すると先生に促されて外を走ったりしてからでないと日常の活動に取り組めなかったのが、他の人の助けがなくても自分で気持ちを切り換えられるようになった。

I-4期：#22～#27 (小6：1月中旬～3月中旬) ～訓練への抵抗が強まる～

訓練：冬休みをはさんで1ヶ月ぶりの訓練のせいか、からだ全体が硬くなっていて、訓練に対する

抵抗はさらに強まり、毎回ぐずって泣き、とくに背反らし動作訓練の途中で強い抵抗を示し、この課題が終るまで泣きっぱなしのことが多かった。自分の頭を叩いたりして抵抗する時は、寝かせや休憩をとって落ち着いてから訓練を再開したが、落ち着くまでに10分もかかったり、休憩を入れると荷物を持って帰ろうと出口に向かったりした。訓練再開後もぐずったり抵抗したりする時は、予定していた訓練課題ができないこともあった。腕上げや躯幹ひねりの訓練でも、抵抗したり泣いたりして緊張が弛むまでに時間がかかったが、弛み出すと弛みに巾はあった。#22～#25の腰入れ動作では、腰の緊張の弛みの巾が広がり、弛め出すと泣き止み、からだに注意を向けているような表情にバツと変わった。[日常]：階段の上り下りがスムーズになって手すりにつかまらなくても上れ、走って移動することが多くなり、トランポリンを担当者と手をつないで4回跳べるようになった。両親に対しては強く自己主張して嫌なことは頑としてやらなかったが、学校では周りを見ながら行動できることが増え、靴下をスムーズに履けるようになった。また人ごみが嫌いでその場に座り込んでしまっていたのに、人ごみを見た途端に走って逃げるようになってきた。

訓練休止期間（中1：4月上旬～5月下旬）

[日常]：2ヶ月の訓練休止期間にからだが硬くなってきた。交流的スポーツ活動では、遊んでもらえるのを待つばかりで体を動かしたがらず、動きがやや鈍くなった。日常生活ではマイペースを貫き、集中力がなく、できないとすぐに投げ出した。母親が不安気に「またお尻が出てきたような気がする」と言った（図6：訓練休止）。

II-1期：#28～#30（中1：5月下旬～6月下旬） ～2ヶ月ぶりの訓練とトレーナーへの甘え～

これまで補助役だったAtrを主トレーナーとして、2ヶ月ぶりに訓練を再開した。またATrが、交流的スポーツ活動でもA子の担当となった。

[訓練]：躯幹ひねり動作・腰入れ動作ではかなり強い負荷をかけないと弛まず、弛んでも僅かであった。腕上げ動作でも緊張のために他動の動きが重く、しかも次々と固い緊張に当たった。訓練に気持が向かず、顔を頻繁に上げては母親や他のトレーナーを見て笑いかけたり、訓練前にトイレに行っただけなのに半笑いで「チッ」（トイレに行きたいの意味）といたり、こ

ちらの指示を聞かないことが目立った。しかし、IwTrに代って肩開き動作訓練を行うと、バツと表情を変え訓練に集中した。[日常]：ATrのするポーズを真似て遊ぶことを楽しんだり、肋木やジャングルジムのような落ちる危険のある遊具に初めて挑戦し、手足の動かし方をいちいち指示しなければならなかったものの、真剣な顔つきで上った。トランポリンを一人で3回跳んだ。

[訓練]：#29・#30では、背反らし動作訓練の途中でぐずって泣き出したが、訓練姿勢のまま待っていると、5～10分で泣き止んで落ち着き、少し休憩すると次の課題を行うことができた。ATrの技術の未熟さもあり、腰周りの強い緊張は全く弛めることができなかった。

II-2期：#31～#35（中1：7月上旬～8月下旬） ～落ち着いた取り組み～

[訓練]：遊んでいなくて逃げることにのみ気持ちが向いたままで終ることが続いていたので、その状態を変えるためにきっちりとしたブロック（動作課題が子どもにきちんと伝わるようにしたり、子どもが逃げられないようにする働きがある。）の仕方を検討し実行した。さらに、例えば腕上げ動作で緊張に当たった時「Aちゃん止まっちゃったよ。こっちの手だよ」などの声かけをしたり、緊張を弛めてほしい箇所を軽く叩いたりすると、それまでの遊びムードやボーッと眠そうな様子が変わり、にやっとしてATrに視線を向け、叩かれている自分の腕に視線を移して指先までピンと力を入れた後、探っている感じで肩をグリグリと緊張・弛緩させ、ゆっくり弛めながら落ち着いて取り組み出した。そして、難しい課題の訓練にもぐずらず取り組んだり、我慢する表情を見せるようになった。[日常]：交流的スポーツ活動や学校での動きが活発になり、それまでしたことのない、両脚を目一杯横に開き、両手を伸ばして上体を後ろに反らしたり前傾したりするポーズを自分からとっては、「ハッ」と叫び、周りの大人に「格好いいでしょう！」というような表情で見せてもらった（図3）。

[訓練]：腕上げ動作の135°以降で当たる緊張や、背反らし動作・腰入れ動作での腰の緊張の弛めはA子にとって難しい課題だったが、ATrがややしつこく取り組み過ぎかな？ぐずりだすかな？と不安になるところまで進めても、苦しそうに目をつぶるものの、同時に我慢しているような表情も見せ、訓練に取り組んだ。



図3 自慢げにポーズ

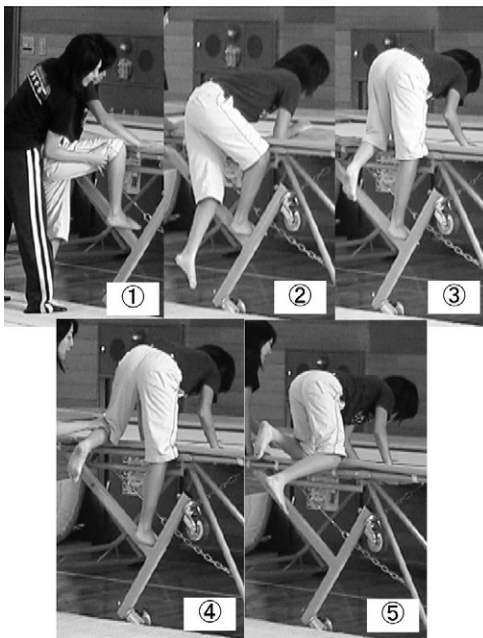


図4 トランポリンの上り方〔II-2期〕

指示が伝わりやすくなった。弛みの中が少し広がり、とくに背中の緊張は安定して弛めることができるようになり、腰周りの緊張も、少しずつではあったが弛めることができてきた。しかし、気持ちが外に向くことがなくなったわけではなく、ATrが声をかけると訓練に気持ちを向けるもののすぐまた離れたりもした。

日常：再びお尻が入って背筋が伸びてきた。母も「また姿勢が良くなってきたように思う」と言った(図6：#32)。トランポリンに初めてほとんど補助なしで1人で上り(図4)、ATrと手をつないで10回跳べるようになり、交流的スポーツ活動の中で他児に初めて自分から関わりに行った。嫌なことに対する頑とした拒否的

態度が和らぎ、以前は水族館に行っても魚に目を当てることができなかったのが、魚を目で追って喜んだり、展示物をジッと見物してまわることが出来るようになった。

V. 考 察

1. 動作訓練の経過とともに見られた変化とその意味

A子は動作訓練を始めるまでの長い間、運動動作にも日常行動にもほとんど変化がなかったのであるが、表1に示すように、1年3ヶ月に渡る35回の動作訓練において様々に変化した。訓練場面では、最初はからだを預けたまま、気持ちは遊んでもらうことのみ向けられ、拘束や痛みを感じた時のみそこから逃れようと激しく動くばかりだったが、緊張の弛緩がまず肩や背中から始まり、ついには最も緊張の強かった腰周りまで可能になり、出っ張ったお尻も入ってきた。交流的スポーツ活動の場では、動きが鈍く、遊んでもらえるのを待つばかりだったが、使ったことのない遊具に挑戦するとか、自分から得意げに大きなポーズを作るとかまでになった。また、日常生活でも、無目的的な動きが多かったのが、表情がはっきりし、視線が定まって、指を差す方を見たり、周囲に関心を示すようになった。

これを発達年齢的に見ると、姿勢運動面では1歳半程度から3歳程度に、言語社会面では7ヶ月程度から2歳半程度になったと判断される(新版K式による)。その変化の中心は、自他分離が明確になり、他者を意識することを通して自己意識も始まり、目的を定めた意図的行動が出てきて、自己コントロールが可能になってきたことであった。訓練前には日常の変化はほとんどなかったことから、訓練期間に急激に起こったこれらの変化は、動作訓練によって起ったとするのが自然であると考えられる。

2. 動作訓練場面において起こったこと：その心身相互作用

訓練場面でどんなことが起こっていたかを、いくつかの例をもとにA子の側の体験として考えてみる。

I-1期の#3：腰入れ動作訓練で、A子は訓練姿勢をとることに抵抗し四つん這いで逃げようとした。KTrが抱きとめ、他動的に膝立ちの訓練姿勢を作り、OTrと協力して両側からA子の脇を持ち、さらにA

表 1 課題動作訓練の経過と日常行動の変化

時期	#	課題動作訓練の経過	日常運動動作の変化	日常生活行動の変化	
I-1	#2	他動的な弛めで、腰周り以外に僅かな弛み		初めてぐずることなくお風呂に入る	
	#3	抵抗を諦め落ち着いて訓練に取り組む			
	#4	トレーナーやからだを見ながら弛緩・主動的弛緩			
	#5	自分で訓練場所に来て訓練姿勢をとるようになる	とんぼを真似る時に初めて腕を横に伸ばせた 自分で用具を持ち出し S 字跳びをやってみせる		
	#6		乗ったことのない輪車やホッピングに乗ってみる	帰りのバスでウトウトした母親をバス停で起こす	
	I-2	#7	Th を見ている時間が継続 主動的な弛みの中が広がり、緊張に弾力	トランポリンの上り下りがスムーズになる	指を指した方向を見るようになる 髪を縛られることへの抵抗が小さくなる
#8		落ち着いて取組めるようになる		取組む方に集中力、できなくても挑戦する	
#9		腕に主動の動きが出るように（入力は曖昧）		人形をかわいがるようになる 初めて悔し涙を流す	
#11			段差につまずかなくなったり転ぶことが減少		
#12				コミュニケーションがとりやすくなる（返事など）	
#13			歩行・走時のドタバタが減少、動きにメリハリ	小さい子が泣いているとなだめる	
#14			ジャンプができるようになる		
#15		「イヤッ」と言って Th に訴えるような抵抗に変化		ピアノの先生から関わりが面白くなってたと報告	
I-3		#16	訓練に対する抵抗が再び強まる		
		#18			自己主張が強く・周りの大人に対してちょっとかい 一人で遊べるようになる
	#20	腕を主動で継続して動かすようになる		他人の助けなしに自分で気持ちを切り換える	
	#21		自分から外に出て体を動かすようになる		
	#22	腰の弛みの中が広がる	階段の上り下りがスムーズになる	両親への自己主張が強く嫌なことに頑なに拒否	
I-4	#23		移動に走ることが多くさらに活動的になる		
	#24		トランポリンで担当者を手をつないで 4 回跳ぶ	靴下を一人でスムーズにはけるようになる	
	#25	訓練に対する抵抗再び強まる		人ごみを見たとたん走り出す	
		訓練休止期間	からだが硬く、動きが鈍くなる	集中力が続かず、物事の取り組みが悪い	
II-1	#30	主動的な弛みの中が広がる、緊張に弾力	今まで拒んできた腹筋トレーニング・肋木に取組む 初めて肋木やジャングルジムに挑戦し上る		
II-2	#31	腕を主動で継続して動かすようになる Th を見ている時間が継続	両脚を開いて上体を反らす新しいポーズをとる 動きが機敏に		
	#32	難しい課題でもぐずらず、我慢する表情	トランポリンで手をつないで 10 回跳べるようになる	初めて他の子どもに関わりに行く	
	#34		トランポリンにほとんど補助なしで上る	嫌なことへの頑とした態度が和らぐ	
	#35			展示物をじっと見物できるようになる	

子が脚を動かすことができないようにブロックした。A 子は興奮しながら「イヤァー」と叫んでお尻を突き出そうとしたが、2 人が突き出せないようにお尻にかなり強い負荷をかけた状態で待っていると、“もうどうしようもない”という感じで「アー」と声を出し、やがて抵抗の力を抜き、腰の緊張を弛めた。弛んだところで再び負荷をかけて待っていると、しくしくと泣き始め、更に大きく弛め、その後はもう抵抗する力を入れることはなかった。終ると四つん這いになって母親の近くまで這って行き、椅子にもたれて少しの間泣いていたが、次の訓練のために KTr が呼ぶと、すーっと自分で訓練場所に来た。

これは、“やりたくないのにやらなければならない”状況に置かれてなんとか逃げようともがいたが、ガッチリとしたブロックからは逃げられないことが伝わり、課題を受け入れて取り組むしかないことがわかって、抵抗や興奮を弱めていったことを示すとともに、興奮が治まった時、トレーナーのからだを通して A 子のからだに伝えられていたことが A 子に伝わったことを示していよう。からだの拘束によって課題を受容させ

ることは、興奮によって引き起こされる衝動的なからだの動きを規制しながら、トレーナーの意図をからだの接触を通して伝え誘導することになるので、トレーナーから伝えられる方向だけが残って、求められていることに気づきやすくなり、今そこでしなければならぬことを理解しやすくなると考えられる。

I-1 期の#4：腕上げ動作で、KTr により腕が上がり始めてからも、A 子は頭を起して母親や撮影中のカメラの方に笑いかけたりしていたが、緊張に当たると顔をしかめながら頭を戻し、KTr をジッと見て、自分の腕に目を移し、その腕に手を添えている KTr の手をそっと触った後緊張を少し弛めた。その後もニヤニヤしながら母親やカメラを見ていて、緊張に当たるとまたパッと表情を変え、“何をしてるんだこの人は”という感じで KTr や腕に視線を移し、その後緊張を弛めた。

これは、自分のからだへの意識の低い A 子が、最初は KTr に腕を動かされていても何をされているのかよく分からず関心もなかったのが（関心は母親やカメラに）、緊張に当たったことで(多分肩に痛みを感じた)

初めて自分の腕を持って何かしている KTr を意識したということであり、また、肩をずらして逃げようとしてもブロックされていてできず、肩に感じている自分の筋緊張の感じに注意を払わざるを得なくなって、KTr が自分のからだに働きかけていることと伝わってくることを感じとって緊張を弛めたということである。

Ⅰ－2 期の#7：躯幹ひねり動作で、KTr がいつものように片方の肩に置いた手に負荷をかけて何回か弛めた後、弱めの負荷に変えて緊張に当たるまでゆっくりと肩を押し下げて待つと、速やかに弛みだし、KTr をジーンと見ながら落ち着いて弛めた。この後 KTr を見るのが多くなり、終っても落ち着いていた。

これは、強めに負荷をかけないと課題が伝わらなかったのが、からだの感覚が少し敏感になってきたことで弱い負荷でも分かるようになったことを示すとともに、KTr から与えられた課題にどう応じ対処したらよいかの分かり始め、訓練にイライラしたり抵抗したりせずに取り組めるようになったことを示しているようである。伝えられる動作課題を、自分で自分のからだを動かすことで解決できる芽が出てきたのであるが、それは、やらなくてはならないのは求められるようにからだを動かすことだとわかり、動かし方がわかり始めたということである。

Ⅱ－2 期の#31：Ⅱ－1 期の A 子が全く訓練に集中しなかったのは、課題がきちんと伝わらず、ずらして逃げることもさせてしまっているからではないかと考え、課題の伝え方とブロックの仕方を厳しくしてみたところ、訓練に気持ちを向けて弛緩するようになった。

これは、ATr を中心とするⅡ期のスタッフのやり方が、A 子を集中させない原因を作っていたことを示している。からだをずらしたり違う動きをしたりの不当な動作を許すようなブロックの仕方では、重い精神遅滞のある A 子を遊ぶことや逃げることに集中させてしまうので、課題がきちんと伝わり、集中させられるようなきちんとしたブロックが大切であることがわかる。

以上から以下のことが考察される。まず第一に、① A 子は訓練で拘束感や痛みを感じた時、そこに働きかけている他者（トレーナー）を意識するようになり、②他者への意識が自分や自分のからだに気づくことに繋がり、③他者から与えられる課題を感じ取って、自分のからだを目的に向かって意図的に動かすように

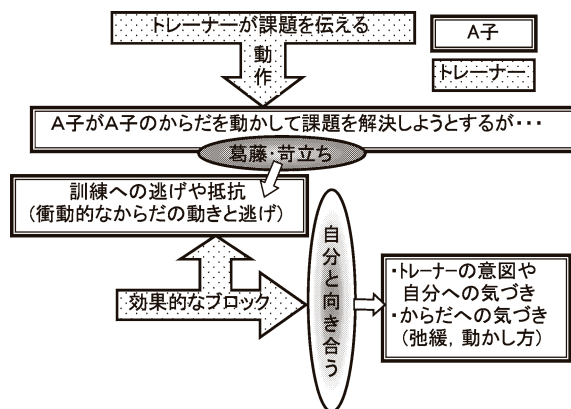


図5 訓練場面で A 子に起っていたこと

なつたと考えることができる。

第二に、動作法は、重度の精神遅滞を持つ子どもにとって最も基本的な学びを、逃がさずに、しかもからだからからだに直接伝えることで可能にすることが期待され、だからこそ子どもへの課題の伝え方を明確にするためにはしっかりしたブロックが大切であることがわかる。図5は以上のことを示している。

第三に、動作変化と日常生活における変化との関係についてであるが、嫌なことからは逃げるばかりだったのに訓練では逃がしてもらえず、取り組むしかななくて実際にきちんと取り組んだ#2の夕方、初めてぐずらず入浴していること、お尻が入ってきたと見られた時に、表情がはっきりして視点が定まったこと、訓練で抵抗の仕方が変わり、トレーナーの目を見て訴えかける明確なものになった時、両親への自己主張が強まっていることなどから、両者は関連して同時に起っているように思われることである。筆者らが、A 子とからだからからだで対峙している時にも、動作改善と認知的変化が一体となって起っている変化であると感じることが多かった。したがって動作法は「動作」だけに働きかけているのではなく、動作の改善を図りながら、その「動作」と密接に関係しているところにも必然的に働きかけることで、主体の起す行動全般に影響を及ぼしていると考えるのである。とにかく、開始時に A 子と A 子のからだとの間にあった大きな隔たりは埋められ、運動動作だけでなく、自己コントロール、自己活動、人との関わり、自我の芽生えが促されたといえる。

3. 出っ張ったお尻が入ることの意味について (図6参照)

#1～#6の訓練において出っ張ったお尻が入ることはなかったが、他の部位の弛緩動作はかなり可能になり、その時運動への取り組み方が積極的になった。たとえば他児らがやっているホッピングや一輪車など、A子には絶対に無理だと思われるような運動に興味を持ち、やろうとした。トランポリンに一人で上ろうとしたが、もちろんできず、どうやって上ったらよいか分からなくてトランポリンの縁に上半身を倒して終わった(図2)。日常生活では、ぐずらずに入浴するような変化があったが、大きな変化はなかった。

しかし、お尻が少し入ってきた#8頃からは、からだの動かし方の無駄が減って、目的的动作になり始め、お尻がさらに入った#13以降には、できる運動動作数が増え、トランポリンに初めてほとんど補助なしで1人で上っている(図4)。走り方は、後ろに引けたお尻の作る不安定な姿勢のバランスをとるためか腕が前に上がっていたが、徐々に下がってきた(図1:下)。また、からだを大きく広げて前後に倒すポーズをとっては自慢げに周りの人に見せ始め、盛んに行った(図3)。つまり、努力すればできる運動にどんどん挑戦して、からだを動かす自信や楽しさを感じているらしかった。日常生活においても、視点が定まり、気持ちの切り換えも良くなって、マイペースや頑固さが緩和され、自分から他の子どもに関わりに行ったり、自己表現が豊かになったりしている。

ここから、お尻は出たままでもからだへの気づきが出てきた時には(#1～#6)、できるできないに関わらず運動へのモチベーションが高まりあれこれやろうとしたが、お尻が入って動くようになると(#8～)、現実的な挑戦が始まり、心理的側面にも質的な変化が起

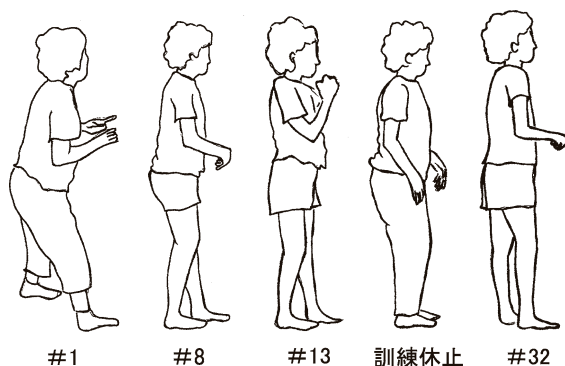


図6 立位姿勢の変化

こったことがわかる。これらは、お尻が入るとまっすぐに立っていられるので重心移動が楽になり、不安定な立位を保つために緊張させざるをえなかった上半身が自由になって、いろんな運動動作が可能になり、認知活動やこころのあり方も活性化して、足が地についた学習が可能になるということではないかと考えている。

VI. 終わりに

動作法は、動作を獲得していく過程で起こるからだところの密接な関係によって、眠っていたいろいろな潜在能力を活性化する訓練であると筆者らは受けとめることができた。この効果はもちろん、動作訓練が対象児に合うように展開されることによってこそたらされるものである。つまり、精神遅滞児に適用するにはそれなりの留意点があり、さらに各ケースにはそのケースなりの留意点と展開があるということである。筆者らは、重い精神遅滞児に適用する時には、導入期に大きな山があることや、認知力や自己認識の高い対象者とは違って、しっかりと伝える工夫や努力が常に大切であることを学んだ。つまり、基本を遵守することが何より重要であり、遵守できるだけの技量と心理的対応が必要であるとの認識である。

ところで、A子が10年近くお尻を出っ張らせた姿勢で生きてきたことを考えると、その姿勢を崩されることに強い不安や怖さがあったと思われる。それだけにお尻を入れることは大変に難しいことであった。A子の変化につき合うことができて感じるのは、2年前まではお尻が引けて出っ張っている姿勢がまさにA子であったように、お尻が入っていくことはまた、眠っていた部分が目覚めるA子の姿であるということである。

この研究の第I期においては、O大学のOTr教授、並びに児童臨床研究センター専門相談員KTr講師に、スーパーバイザーあるいは上級トレーナーとして、全面的にご指導いただいた。動作法の開発者の一人であるOTr教授の関与なしには、導入期の山は越えられなかったのではないかと考え、ここに、そのことを感謝をこめて記させていただきます。

引用・参考文献

- (1) 林 茂男 (1992)：子どもの成長・発達における動作の意義 現代のエスプリ 至文堂。
- (2) 窪田文子 (1994)：精神薄弱教育における養護・訓練の

- 指導—動作法の応用について— 特殊教育学研究32(2) 73-78.
- (3) 宮内千晶・石川尚子 (2001)：脳性まひ児の動作学習について—痙直型脳性まひ女児に対する「動作訓練」を通じたの考察— 日本女子体育大学紀要31 53-63.
- (4) 成瀬悟策 (1984)：障害児のための動作法 東京書籍.
- (5) 大野清志・村田 茂 (2003)：動作法ハンドブック応用編 慶應義塾大学出版会.
- (6) 大野清志・田中久恵 (1983)：動作課題による重度精神発達遅滞児の行動変容について 教育相談研究第21集 85-96.
- (7) 鈴木 清・石川尚子他 (1982)：体育心理学 実務教育出版.
- (8) 田辺正友・田村浩子 (1988)：精神遅滞児の身体運動模倣の発達—身体像との関連— 奈良教育大学研究所紀要 24 11-17.
- (9) 田辺正友・田村浩子・岡本 壮 (1987)：精神遅滞児の歩行運動に関する発達的研究 奈良大学教育研究所紀要 23 29-43.

(平成16年9月22日受付)
(平成16年12月16日受理)